

**令和 7 年度兵庫県サービス管理責任者等基礎研修
事例の概要**

この事例の登場人物、施設名等の名称はすべて仮称です

富士 達也 さん

記入者 支援センターあじさい 相談支援専門員 中村 洋

事例タイトル	家族との暮らしが困難になり、共同生活援助事業（グループホーム）と就労継続支援B型事業を利用しながら、地域で生活することを希望している事例
年齢・性別・ 家族構成・家族状況・現在の居住歴	【ご本人】 富士 達也（ふじ たつや） 平成 16 年 4 月 2 日生 21 歳・男性 A 市で生まれて以来家族と生活してきた。 【家族構成】 現在の実家は、父親と弟の 3 人暮らし。 【実父】 富士 博徳（58 歳） 無職 もともとは大工で、以前はとても面倒見が良く、子育ても積極的に行っていた。現在は、椎間板ヘルニアの悪化により、無職となっている。手術をしても回復は見込めず、生活保護を受給している。 何とか自分のことはこなせるが、子どもの世話をすることは、身体的にも経済的にも難しくなっている。 【実母】 ご本人が小学校 1 年生の時に病気にて他界。 【実弟】 富士 崇之（18 歳） 高校 3 年生 心身ともに問題なく普通高校に通っている。高校卒業後は就職予定だが、兄の面倒までは見られないとのこと。兄との関係は希薄であるが、今後について心配はしている。
手帳 障害支援区分	療育手帳 : 障害の程度（総合判定）B2 ※軽度の知的障害 障害支援区分：区分 2
経済状況	家族・・・生活保護費受給により、生活しており、金銭的余裕はない。 本人・・・障害基礎年金を受給している

生育歴・学齢期の状況等	【誕生～幼児期】（Ｈ１６年４月 ～ Ｈ２２年３月） ○Ａ市で２人兄弟の長男として出生。 ○初語や歩行に少し遅れはあったが、３歳児健康診査や就学時健康診断などでは特に医師や保健師の指摘事項は無かった。 【学齢期（小学校）】（Ｈ２２年４月 ～ Ｈ２８年３月） ○小学校の１～２年生時は普通学級に通っていたが、授業中落ち着きがなく、席を立てて教室内を歩き回る、突然怒りだし友達を殴ってしまう等の行動が頻繁にあり、クラスから孤立していった。尚、小学校１年生の時に、母親が他界。以後、父親と弟の３人暮らしとなった。 ○小学校１～２年生の行動もあり、児童相談所で療育の判定を受け、軽度の知的障害の判定を受けた。 ○小学校３年生からは、自閉症・情緒支援の特別支援学級に移り、突発的な行動はあったが、学校生活に大きく支障をきたすことはなかった。 ○小学校６年生の二学期に、他生徒との学力差や学習環境に馴染めない状況により、担任からは、中学は特別支援学校への進学を勧められた。 【学齢期（中学部）】（Ｈ２８年４月 ～ Ｈ３１年３月） ○中学はＡ市内にある特別支援学校に進学し、中学校での生活は太鼓部に所属し部活動では楽しく過ごしていた。 ○太鼓部の顧問は、達也さんのできるところは積極的にほめて、苦手なところは根気よく教えてくれた。 ○部活動以外では、昆虫も大好きで、昆虫図鑑を見ている時は周りの声が聞こえないほど集中していた。また、同じクラスに昆虫好きの友達があり、休憩時間や放課後には、昆虫の話題を中心に談笑をしている姿が良く見受けられた。 ○学校の科目としては、職業・家庭科目を最も好み、父親が大工だったこともあり、達也さんも木工に興味をもって犬小屋をなどつくった。 ○好きなことには積極的に取り組むが、興味がないと席に座っていることができない。困ったことや、興味がないことなど自分から話すこともできず、話しかけられるのを待つことが多い。 【学齢期（高等部）】（Ｈ３１年４月 ～ Ｒ４年３月） ○高等部に進学後も高等部の太鼓部に所属し部活動に積極的に参加していた。 ○友人関係では、中等部から仲の良かった友人も高等部に進学し、中学部時代と同様に休憩時間や放課後には、昆虫の話題を中心に談笑をしている姿がよく見受けられた。
--------------------	---

	○高等部生活の全般をとおして、大きな問題となるようなことはなく卒業を迎える。 ○高校2年生の春から週に2回ほど放課後等デイサービスを利用し、前向きに利用できていた。児童デイサービスでも高等部で一緒に友人と昆虫の話題で談笑することが多かった。また、調理レクや野球鑑賞会などのイベントにも前向きに参加していた。 周囲の環境設定や理解者がいると打ち解けられ、楽しいことや悩み事などを教えてくれることもあった。はじめは職員に話しかけようとしなかったが、1度昆虫や野球の話で盛り上がると次回から職員の方に視線を送り、話しかけたいが話しかけられないような様子が見受けられていた。その際、職員側から話しかけると会話が続くことが多かった。 【特別支援学校高等部の元担任の主観】 ①同じような内容のことについても、理解できているときとそうでないときの差が大きい。特に集団の場面では、話したことが届かないことは多かった。 ②自分でできないときになかなかヘルプコールが出せない。 ③教えられたことを忠実にやろうとするが、思った通りにならないと、何か理由をつけてやっていることを止めてしまうことがあった。 ④人に認められたい気持ちをとても強く持っており、虚勢を張ってしまうところが度々見られた。 ⑤なかなか伝えたことが身につかないときに、繰り返し丁寧に声をかけていくと腹を立ててしまうことがあった。 【目標を達成していく上で効果が認められたこと】 ①作業していく内容については、他の生徒がいない教室で、担任と一対一で見本を示しながら教示していくと、5～6工程の内容でも対応できることは多かった。 ②やるべきことについての内容とその手順は、料理のレシピのように写真を添えて文章で示すと、自分で確認しながら取り組めることが多くなった。 【卒業後】 ○特別支援学校の高等部を卒業後は、車の製造部品を作る工場に就職。 ○進路選択に際して、保護者(父)、特別支援学校の担任、放課後等デイサービスの児童発達支援管理責任者が集まり協議を行なった。
相談経過の要約	○特別支援学校の高等部を卒業後は、車の製造部品を作る工場に就職し、面倒見の良い上司がいて達也さんも素直に対応していた。上司がわかるまで丁寧に教え、ときに叱咤激励してくれたことで、安心して働いてい

た。

しかし、1年後（R5年4月）に上司が変わり、その上司が他の職員（障害者）の対応に追われて、達也さんにあまり気を配らなくなった。

それから半年後（R5年9月）に達也さんは、父親に「上司からの注意が怖い」「仕事が集中して取り組めない」などの不安を訴えることも多く、工場に通えなくなり、そのまま退職してしまった。

○特別支援学校高等部の元担任は、就職した数か月ほど、職場へ様子を見に行き、相談にも乗っていた。半年ほど経ってからは、落ち着いて仕事ができおり、連絡が遠のいていた。その後、退職したことも知らされていないかった。

○退職以後は、「誰とも会いたくない」と話していたが、「また楽しく働きたい」とも話す時もあった。しかし、きっかけがなく自宅での生活を続けていた。

○自宅の生活で気晴らしの機会を作るため、父親と野球観戦に行ったことがあり、そこからテレビでも野球を観賞するようになった。

○達也さんが退職して半年後（R6年4月）、大工（自営業）をしていた父親が、持病の椎間板ヘルニアの悪化により仕事ができなくなった。

また、父親は生命保険などにも加入しておらず、約1年ほどは貯蓄で何とか生活していたが、経済的困窮状態となり生活保護受給となった。

○以前は父親が家事全般を行っていたので、父親が家事を十分にできなくなったことにより家庭内は乱雑な状態となり、また、インスタントラーメンやレトルト食品ばかりの食事で偏りがあった。

○父親から「達也の面倒をみていくことができない。何とか施設に入れてもらえないか」と市役所に相談があり、達也さんも「お父さんと離れて、自分で生活できるようになりたい」と希望し、相談支援センターあじさいでの計画相談支援事業の利用を開始（R7年4月）となった。

○達也さんは、相談支援センターあじさいで相談を始めて、市内のグループホームや就労継続支援B型事業所への見学を行う中で「相談しながら事業所を利用したい。」「今は朝も起きられない。掃除や洗濯もできないけど、自分のことは自分でできるようになりたい」「一人暮らしに向けた準備をしたい」「もう一度働く自信はないので、そのために力をつけたい」とグループホームを利用しながら、就労継続支援B型事業所に通所することを希望した。尚、相談員から就労継続支援A型事業所や就労移行支援事業所も紹介したが、一度、失敗したという不安もあるため、まずは就労継続支援B型事業所から力をつけて行きたいと希望した。

また、本人の生活場面についても、相談支援専門員としては、自立生活援助の利用も検討したが、①一人暮らしの経験がまだないこと ②朝起きられないことについて、他者がいる場面の方が本人にとっても刺激にな

	り、生活リズムを作りやすいのではないかと考え、グループホームの見学を勧めた。 【相談支援専門員からの特記事項】 ○達也さんからの質問はほとんどないが、こちらから話かけるとボソボソと返答する。話をする事自体は好きな様子である。 ○会話の理解力については、相手の話を「はい、はい」と返事をするので、分かっているように見えるが、すぐに理解はできていない様子。 ○達也さんの見た目は年齢相応の好青年である。ただ生活の乱れから、服装には少し汚れが目立っていた。 ○自立した生活というイメージがまだ持てていないが、周りの人の協力が得られれば、十分地域で生活できると、相談支援の担当者は考えている。
ご本人が望む暮らし	○「お母さんが死んでから、お父さんが一人で頑張ってくれたので、あまり迷惑はかけたくない」「自分のことは自分でできるようになりたい。」「将来は一人で暮らしたい。」と思っている。 ○「今は働く自信がないので、力をつけたい」「1人でコツコツと集中できる作業がしたい。」「働くときには優しい上司がいるところが良い。」と話している。 ○「朝はなかなか起きられない。」「掃除や洗濯、調理もできない。」「困ったときに相談できない。」(相談できない)→(伝えられない)ことに困っている。 ○趣味である「昆虫図鑑を見ることや、野球中継のテレビ観賞ができる時間が欲しいな」と話しているが、友達がうまくつくれないことを気にしていて「一緒に遊ぶ友達が欲しい」「昆虫や野球の話しができる友達ができたら嬉しい」と話している。

アセスメント票

記録：相談支援センターあじさい

相談支援専門員 中村 洋

相談日時	令和7年4月30日13時～15時
氏名等	富士 達也氏（男性：21歳）男性 知的障害（B2） 障害支援区分 2
望んでいる暮らし	【全体】 ○父親には世話になったので迷惑をかけたくない。 ○困りごととは相談したい。 ○普通に仕事をして、一人暮らしがしたい。 【生活面】 ○自分のことは自分でできるようになりたい。 ○将来は一人で暮らしたいが、今は、朝もなかなか起きられないし、掃除や洗濯、調理もできない。困ったときに相談できるようになりたい。 ○一緒に遊ぶ友達が欲しい、昆虫や野球の話ができる友達ができたら嬉しい。 【就労面】 ○働く力がついたら、また工場で働きたい。 ○今は働くことの自信はないので自信をつけたい。 ○1人でコツコツと集中できる作業が好き。 ○働くときには優しい上司がいるところが良い。
身体 の 状況	○特に身体機能に問題ないが、本人は最近肥満体型になってきたのを気にしている。身長175 cm 体重80キロ
精神面 の 状況	○突然怒り出したりすることは、以前に比べれば少なくなってきた。ただ自分のペースを乱されたり、急かされたりするとイライラする様子が見られる。
生活の 自立度	○朝起きるのが苦手で生活リズムがなかなか安定していない。ADLは自立している。 ○家事は手先が器用なので練習すればできるようになると考えられ、やり方や手順について確認する必要がある。
気持ちの 自立度	○家を離れた暮らしは全く経験したことがないので、初めは戸惑うこともあると思われる。また、自分の思い通りにならないと、他の方とトラブルになる可能性もあるので、イライラしそうなときには早めに職員に伝えられると、トラブルが軽減できると考えられる。
服薬状況	現在は投薬なし
経済状況	【収入面】 障害基礎年金 【支出面（今後の見通し）】 グループホームの費用 家賃30,000円（家賃助成20,000円） 食費20,000円 光熱水費15,000円 日用品費 3,000円 生活費（おこづかい）20,000円 ※特定障害者特別給付の対象者であり、国と市町から家賃助成20,000円あり。
趣 味	○昆虫の図鑑を見たり、野球中継のテレビ観賞。 ○手先が器用なので木工が好き。菓子・ケーキ等の買い物など

キーパー ソン	富士 博徳 氏（実父） 仕事で椎間板ヘルニアが悪化し、自分のことで精一杯な様子。
家 族	【同居の家族】 富士 博徳 氏（実父）、富士 崇之 氏（実弟） 【別居の家族】 父方母方の祖父母について 父方の祖母は県外（遠方）にいるが、父方の祖父、母方の祖父母は他界している。母が生きていた頃は、年１回は家族で両祖父母に会いに行っていた。
就 労	○手先が器用で興味をもつと集中できる。また、面倒見がいい人の話は素直に聞くことができる。しかし、以前の工場での仕事の経験から「人に会うのが怖い」「また注意されるのが心配」と不安感を述べる。 ○「１人でコツコツと集中できる作業が好き。」「働くときには優しい上司がいるところが良い」「普通に仕事をしたい」といずれしっかり働きたいという意欲はある。 ○移動手段は、徒歩。公共交通機関は、これまでほとんど利用したことがないが、練習すれば利用できそうである。